

素敵な出会いが 人生をいろどる

第40回「小さな親切」はがきキャンペーン

今年、「言葉」の力を感じる作品が多くありました。何気なく使っている言葉ですが、人を傷つけたり、励まし勇気を与えたり…。

言葉は「言葉」と言われるように、使う人の心・想いが伝わります。

コロナ禍によって人間関係がますます希薄となった今だからこそ、メールやスタンプではない、生の言葉が人と人をつなぎます。

大賞に輝いた南平さんの心を揺さぶったのは、まさに店員さんの一言。マニュアルだけではない、店員さんの臨機応変な接客で、夫婦水入らずのランチを楽しむことができました。店員さんは、トイレに移動するときも観葉植物をどかしたり、帰りにはドアを支えてお見送りと終始お客さんに寄り添い、その親切に救われた外食となったそうです。

このほかにも、荷物を持ち痛む足をかばいながら階段を下りる婦人に、「筋トレをさせていただきます」と荷物を持ってあげた女子学生さんは、お礼を言う婦人に、「ご協力ありがとうございます」と笑顔で立ち去った…というエピソードを綴った作品も。なんて、ウィットに富む言葉でしょう。

審査をしながら、たくさんの方の気づきをもたらしました。自分もこんな言葉を使いたい、と思った今年のエッセイコンテストでした。

(審査員より)

大賞

14:05のランチ 愛知県 南平 茜さん(38歳)

久しぶりの外食。
それだって、私たちは普通の夫婦のようにはいかない。
主人に手を貸し、車の後部座席から車椅子に乗せる。車椅子の後ろには酸素ボンベ、腕から伸びた点滴のルートが絡まないうまどめて、こちら車椅子に固定する。私は替えの酸素ボンベをしまったリュックを背負い、息を整え、やっと店に到着。

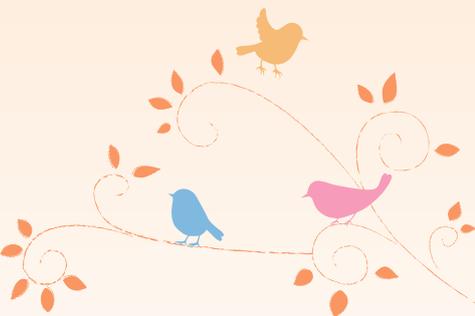
ランチタイムの14:00を5分過ぎていた。
「コーヒーとケーキだけでも食べていこっか」
久しぶりの外食を楽しもうと振舞ったが、彼は残念そうに頷いた。
広い席に通していただくと、14:00までと書かれたランチメニューがまだテーブルに出ている。恨めしかった。

お水を持って店員さんが現れ、笑顔で、
「ランチメニューも大丈夫ですよ」
「えっ? 14:00までじゃ?」
と聞くと、

「14:00前には、もうお店の前におられましたから」

ワッと声を出して泣いた私。見ていてくれた人がいる。闇のような在宅介護の中で、こんなに人の親切が、心遣いが染みたことはない。

二人で、ランチカレーを食べた。元気があった時に食べたのと同じで、本当に美味しかった。



第40回「小さな親切」 はがきキャンペーン

後援：日本郵便株式会社・
読売新聞社

協賛：株式会社河出書房新社

応募総数：1,955編

作品集：全入賞・入選作品を収録し、
来年2月中旬発行予定

※入賞・入選者はWEBサイトで発表
いたします。

